
私の徒然草

ひこじろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の徒然草

【Nコード】

N6044Z

【作者名】

ひじりう

【あらすじ】

私の日常に起こる出来事を書いてみました。不定期の連載です。気楽に読んでもらえればありがたいです。

猫の舌

私に小説サイトを教えてくださった方たちはチャットの友人である。私も文章の勉強になるかと思ひ筆ならぬキーボードを叩いてみた。これがなかなか頭を使う作業で、また他人から批評をもらうと嬉しくなるのでなんとか二作品書き上げた。小説というのが私にとって「仕事」や「作業」といった義務的なものもあるが、想像を膨らます楽しい知的快樂の場でもあるように思う。

この随筆を書くころと思つたのは文章の勉強の一つとして、とりあえず「書く」という作業をワンランク上達させるためである。だから題材も気ままなものにしたし、第一ほとんど家にいるから中身も家に関するものが多くなると思う。読者諸氏にはあまり面白い話ではないだろうが、コーヒーマグのつもりで読んでもらえたら幸いである。

時に・・・

我が家には三匹の猫がいる。二匹は黒の雑種で兄妹、もう一匹は茶トラで尻尾が短い。猫を貰い受けた頃は粉ミルクと猫用の缶詰少々に飯をまぶしたものを食わせていた。飯時になるとみゃーみゃー鳴くので、それがなかなかかわいいじゃないかと思つていた。ところが猫というのは雑食なのである。少し年を取ったころになると、ネズミやスズメの惨殺死体が日常の茶飲み場にころりとおいてあることがあった。一瞬何がどうなっているのかわからないので、赤色にそまつた骨の山を見たときはまったくもって何がどうなっているのかわからず、あとになつて悲鳴を上げるといのが常であった。

まあそれでも元気に暮らしてきたし、大病もそれほどしなかつた。猫のいる生活というのは家庭に一つの灯を照らすかのようで暖かい。

たとえ人間の家族が冷め切っけていても、猫の顔を見れば誰もが頬を緩めたものだ。

と、ここまでではよかった。茶トラのほうは後から来た猫だからあまり不平を言わぬが、黒猫二匹には少々困ったことが起こった。

親が60の坂を越えたとき、猫も同時に老けた。そして、歯槽膿漏がたたってなかなか食事がつまうかない。三月に一度、動物病院に連れて行って痛み止めを打ってもらう。こうして老猫二匹は食欲を回復した。しかし、缶詰を与えてみてもそっぽをむくばかりであまり食べない。ドライフーズは食べるがそれも腹の足しにと割り切っている様子だ。

ある日、寿司を食っていたら雄猫がやってきて前足を人の手につんつんとあてがう。親父が振り向くと、足の上に乗って寿司を食おうとするので、親父はマグロを一切れ犠牲にした。雄猫は美味いとばかりに食ったが、親父はシャリだけを食う羽目になった。

マグロが終わるとまた手を出してくる。今度はサーモンが取られた。親父はシャリだけを食べながら、

「口が奢りやがった」とぼやいた。

そうして、ある時は刺身、またあるときはアジの干物と人の飯を横からもらい、ついには味噌汁の油揚げ、ポテトチップス、ショートケーキ、食パンと人間が食べるものに関心を向けるようになった。その分、猫用の食事に気持ちが悪くなったようだ。確かに猫の缶詰にもカツオやマグロ、鳥のささみなどが入ってはいるがやはりそれぞれ臭みがある。特にカツオなどはほかの刺身よりも臭みがある。だからワサビではなく生姜醤油で食べるのが習わしになっているのだらう。しかし、猫の缶詰には生姜醤油はないので食べる気がしないらしい。

マグロにしても鳥にしても所詮はくず肉の寄せ集めである。一度、ピンナガマグロの中トロを食べた身としては、もはや猫のそれに関心など示すはずがない。缶詰を嫌うようになってからはもっぱらボ

ンレスハムである。しかも、どこそこ高原のなんとかハムという、ちよいとお高いハムが好きらしい。しかし、ハムも何十枚とあるわけではないから一日二枚。それとドライフーズ少々、水たっぷりという生活スタイルになった。

しかし、食欲はあるのでがつついてくれるだけ飼い主としてはありがたいのだが、また困ったことが起こった。

我が家には一年に一回、静岡県伊東市からアジの干物がたくさん届く。このアジの干物は天然のアジを開いて、天日干しにしたものだ。美味しんぼ風にいえば「本物のアジ」というわけである。天日干したアジはイノシン酸だかアミノ酸だか知らないが、うまみ成分が活性化してもかくも美味い。このアジが届いて早速食そうと思ったら、例のごとく黒猫二匹がやってくる。そうして親父とお袋のアジは半身を取られる羽目になるのだ。このアジがなくなると金目の干物に手をだし、カマスも食った。そして、我が家から天日干しのアジが消え機械干した養殖のアジが食卓に並ぶと、匂いを嗅いだら、

「不味い」

とそっぽを向かれる。干物だけではない。刺身でも、養殖の赤みよりトロのほうが好きだ。あるとき、スーパーで天然クロマグロと書かれた赤身に出会った。物見遊山で買ってみたところ確かにそこらの赤みより味が濃くてうまい。そして、その匂いを嗅ぎつけて猫がやってくる。親父も人がいいから赤みをいったん咀嚼してそれから猫に出す。猫もこれは美味いと舌鼓を打つ。ここまではよい。その後、他の赤みは水っぽくて食えないとばかりに食べなくなった。

こうして我が家の猫どもはいわゆる食通になり、出先の家でずうずうしくもちくわなんぞをもらうようになってしまった。

「どうしたもんかね」

と尋ねると、親父は、

「仕方ないだろ。そうなっちゃったんだから」

という。そうなっちゃった原因は多分、人間が食う特上のものをあ

げた父である。そして、朝6時になるとこの食通どもが飯だと叫ぶ。そのたびに私は何とか高原のボンレスハムを片手に、眠い目をこすりながらハムをちぎってやるのだった。

<了>

ピアノとバナナジュース

役所に提出しなければならぬ書類があり、父と車で行った帰り道、一軒のコンビニエンスストアに立ち寄った。飲み物の棚にバナナ・オレ>と書かれた紙パックが置いてある。私は反射的にそれを取ってレジに持って行った。

私はバナナジュースや、イチゴジュース、メロンジュースと聞くといつそれを購入してしまう癖があるようだ。そして飲んで落胆するのである。

昭和62年の春、私は小学校に入学した。ほどなくしてピアノ教室に通うことになったのだが、この時の感動が未だに忘れられない。私と母は、母の知人の紹介でS先生のお宅にお邪魔した。まだバブルが弾けるずっと前のことだと思う。大きな庭に平屋建ての家。犬が庭に放し飼いされている。

インターフォンを押すと玄関から若い女性が出てきた。肩ほどまで伸ばした髪は軽くウェーブがかかったようできて、優しそうな瞳を持っている。もっと言えば美人の定義をすればきつとこの人はまず定義の枠の中に入るのでないかというくらい美しかった。私の初恋は同じ年の同級生だったと思っていたが、いやそれ以前にかくも美しい人を知っていたのだ。

私はそれから16になるまでこの先生にピアノの手ほどきをしてもらったが、後半はふらついてるくるく練習もしなかった。だから未だにベートーベンの月光の第一楽章が少し弾ける程度で、指がそれ以上動かないしもう音符も読めない。

先生との授業はおしゃべりが半分くらい占めていた。30分という時間でピアノを弾いては合格のシールをもらう。先生はよい聞き役であり、私は練習もそっこのけで学校のことなどを話していた。30分間はいわば密室だったのである。

2年生になった時、ピアノの発表会をされると言われた。それから

は緊張のしどろしどで、間違えたくないから練習もした。それでもつかえるので始末が悪い。

とうとう本番になって演奏をしたがやはりミスをした。それでも弾いてしまえば後はこちらの知らないことなのでほっとしたものだ。発表会は市民会館の小ホールで行われたが、一階のロビーに隠れたように自動販売機が置いてあった。見るとバナナ・オレと書かれた紙パックがあった。私は両親にねだり、それを買ってもらったが実に美味かった。実際は果汁とは名ばかりのエキスに牛乳と砂糖を入れたものだろうが、どういうわけかバナナのよい香りがして牛乳のkokと合わさるとなんと心が豊かになるような気がした。

以来バナナジュースは私にとっては高価な飲み物となった。というのも買い物に出かけてもバナナジュースは売っていない。どこのスーパーに行ってもあの紙パックのジュースはないのである。それに加えてまだ幼少の私には現金の支給がない。つまり買いたくても変えない身の上だったので、いつそにバナナジュースとは縁遠くになった。

昭和が終わり、平成の世に変わっても先生と私の関係は良好だった。たとえ学校でろくな目に遭っていなくても、この人の前ではそんなことを忘れていたし、ピアノの授業も良好、自宅の練習も毎日していた。そしてまた発表会の日が来た。カチンコチンになった私は、一応の練習をして人前に出た。ミスが三回あったが、一通り弾ききった。この日は学校の同級生を招いた。ジュースを飲もうという段になって、私は急いであの時の自動販売機を探した。奥の水飲み場に併設された自動販売機にはバナナジュースが置いてあった。私はコインを入れると真つ先にバナナジュースを選んで飲んだ。

バナナジュースを買うのは市民会館の小ホールしかない。そして金もない私は、また発表会が来るのを待たなければならなかった。今度は1年後に発表会があった。隣の大ホールではピアノストの中村弘子が来ていて、賑わっているようだった。私は自動販売機を探したが今度は無かった。折角の機会は業者と市役所の都合で打ち消

されてしまったのである。

中学に入るといろいろと不幸が重なった。その話は別の機会に譲るが、学校をさぼるようになった私は方々から冷たい視線を送られていた。S先生も私が学校に行っていないことをどこかで聞いて説諭した。何を言われたかは覚えていない。ただどうしようもなく涙がこぼれた。この人に泣き顔を見せたのはこの時ただ一回である。そうして練習に身が入らなくなった私の指は段々と固くなって、滑らかに鍵盤を叩くことができなかった。楽譜も記号ではなくただの絵のように見え、結局落第の印を押された格好となった。

以来、ピアノとバナナジュースとは会うことがなかったが、5年ほど前に近くのローソンで<タカナシのバナナ・オレ>という商品を見つけた。牛乳の成分が70パーセントでバナナの果汁が1パーセントも満たないというものだった。この時は患っている病のせいではなかなか外出ができなかった。だからまとめ買いをしたのである。帰宅して紙パックにストローを差し込んでみると、なかなか美味い。しかしあの時感じた、至福の感動とは程遠い。どこか水っぽくて、コクが欠けるのである。それでもバナナジュースが買える身分になったので、毎回購入していた。

今、私の左手にはバナナジュースがある。飲んでみたけれど、あの昭和から平成にかけての少年時代に飲んだものより味が薄い。私はピアノの先生と一緒にバナナジュースを美化してしまったのだろう。私の苦い青春はコクのないバナナ・オレとともに消えていくのだろう。できるならそうであってほしいと願う。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044z/>

私の徒然草

2011年12月29日02時53分発行